本と地域の情報誌

県北 どらくろあ

第91号　2023年10月1日（毎月1日発行）

木次線ストロール①　油木駅

「広島県最北の駅　国境番所とたたらの里」

いよいよ木次線である。備後落合駅と島根県の宍道（しんじ）駅までを走る路線。芸備線のように、終点まで行くつもりはないが、県境を超えていくつかの駅を訪れてみたいと思っている。

かつては松江や米子の山陰と、広島の山陽を結ぶ「急行ちどり」が走っていた。庄原から広島に行き来するときは、ちどりのダイヤに合せて予定を組んだ。しかし、庄原駅から備後落合駅を経由して木次線を利用したことはなかった。木次線に乗るのは今回が初めてだ。

9月18日月曜日、朝の8時前に車で庄原の自宅を出た。西城川や芸備線の沿道を走るのだが、稲刈りを終えた田と黄金の稲穂が垂れている田が半々ぐらい。白い花が咲いている畑は蕎麦である。

備後落合駅に到着したのは、8時30分を過ぎていた。駅舎の待合室では名物ボランティアガイドの永橋則夫さんの元気な声が響いている。壁面に自身で貼りだした写真等の資料をポインターの光点で示しながら、解説をしてくれる。今日は敬老の日で祝日だが、観衆はわたしを入れても4人。しかし、熱弁だった。

永橋さんはかつては国鉄の機関士として、様々な列車を運転した鉄道員だった。赤字ローカル線で廃線が噂される中、毎日のように駅に通っている。80歳を過ぎても意気軒高、駅守という言葉がふさわしい。ガイドの最後に、落合駅の往時のジオラマを見せてもらった。支援者の一人が寄贈してくれたそうで、油置き場だった倉庫が展示室になっている。

9時20分、永橋さんに見送られて、木次行き列車は発進した。芸備線と同じディーゼル機関車のワンマンカーで、そこそこ車内は混んでいる。西城川沿いの線路をゆっくりと登りながら、15分ほどで油木駅に到着した。料金は210円、降車はわたし一人だけ。広島県下では、最北にある駅である。

駅舎はなく、ホームの屋根の下にプレハブの小さな待合室がある。駅ノートが置かれていたが、設置されたのが去年の11月で、書き込みはまだ少ない。ホームの東側に太陽光パネルが並んでいる。反対側の丘の上には、2016年に閉校になった油木小学校の校舎やグランドが見える。

駅前には、簡易郵便局の他に、商店だったと思われる建物が何件かあるのだが、「しょうばらどぶろく特区・濁酒油

「宮田武義翁出生之地」の石碑。宮田翁の生家の松尾家には江戸時代、国境番所が置かれていた。

木のしずく」の看板が気になってあとで調べると、高原酒造の直販所だった。同社のホームページによると、「しょうばらどぶろく特区」は国の構造改革特別区域法に定める酒税法の特例措置を受けたもので、２０１８年に酒類製造免許を取得。約１ヘクタールの田んぼで育てた「ひとめぼれ」を用い、年間７００リットルを醸造し「油木のしずく」のブランドで販売。市内のスーパーや宿泊所でも扱っているというから、機会があれば試飲してみたいと思う。

駅前の通りを直進すると、国道３１４線に出る。左折して出雲方面に歩くと、しばらくして「宮田武義翁出生之地」の石碑がある。芸備線ストロールで備後西城駅を紹介したときにも書いたが、宮田氏は東京・日比谷に中華料理店の「山水楼」を創業、多くの著名人に愛されて、山水楼は映画や文学作品に数多く登場する。氏は「比婆・道後・帝釈国定公園」の指定や「県民の森」開設にも尽力、西城町名誉町民賞を受賞している。

石碑には「油木村番所跡と松尾家」の文字も刻まれている。ちなみに揮毫は亀井静香氏。解説板によると、油木は雲州横田超えの要衝で、浅野藩は通行人と物資の安全を監視するため国境番所（百姓番）を置いた。この番所が置かれたのが松尾家で、宮田氏の生家なのである。松尾家は明治に入って全焼し転居。石碑から少し離れて線路を超えた草地に、「油木村番所跡」と刻まれた石塔が立っている。

松尾家には、頼杏坪（頼山陽の叔父）も宿泊している。浅野藩政治（まつりごと）顧問となった頼杏坪は、三次、恵蘇（比和、口和、高野町）、三上（旧庄原市）、奴可（西城、東城町）４郡の代官と郡廻り役を担うことになる。文政３年（１８２０年）、春季巡視の後、頼杏坪は医師のすすめもあって、足の病の療養に潮湯あみに行くことを思い立つ。当時の杏坪は70歳を超えていた。そのときの紀行文が「しお湯あみの記」（出雲の国へ湯治の旅日記）として残されている。

油木村の記録では「奴可郡油木村長百姓滝平宅へ押入侵入一件」が面白い。襖の下張りから発見された古文書で、江戸末期に長百姓（おさひゃくしょう、本百姓の代表で集落の長も兼ねた）宅に押し入った盗賊を、伯耆国（現鳥取県）の多里宿で捕縛、その顛末や費用が詳細に記録されている。機会があればまた別項で紹介したい。

国道沿いの民家の軒先で寛いでいるおばあちゃんに声をかけられた。ミニコミ誌の取材をしているのだと告げると、「わしはよその人間じゃけえ、何も知らんのですよ」。他所から嫁入りしたのだろうが、もう十分に地元の人だと思うのだが。

木次線の冬季の除雪作業のことを尋ねてみた。落合駅の永橋さんの解説では、大雪の時は沿線の住民にお願いして、線路の除雪作業を手伝ってもらったという。大変な重労働で、日当は6千円と当時としてはかなり高額。これで借金が返せて年が越せると、雪が降ると喜んだ人もいたらしい。

おばあちゃんの家の男手も、何度も雪かきに駆り出されたことがあるそうだ。今は道路が整備されて、まとまった雪になると木次線はすぐに運休、不通になった区間を代行タクシーが走っている。

油木川（西城川）沿いの国道を、備後落合方面に向かって南下した。幻の珍獣「ひばごん」が出現した場所が点在しているのだが、看板があるわけではなく、地図を見ながらこだろうなと確認して通り過ぎた。蕎麦の白い花が満開で、渓谷の中にある蕎麦畑（写真上）は幻想的な雰囲気。腰を下ろしてしばし休憩、持参した焼きそばパンとベーコンエッグパンで昼食。

川をかなり下った所で、川辺に降りる階段を見つけた。水辺のほとりの小石を探すと、小さな穴の空いた黒っぽい石ころがぽつりぽつりとある。たたら製鉄の精製過程でできる鉄滓（てっさい）で、金糞などとも呼ばれている。いくつか拾って自宅に持って帰った（写真下）。磁石を近づけるとかすかに反応、確かに鉄分が含まれている。油木村でたたら製鉄が盛んだった証拠である。

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「ひまわりの如く」

山本須磨子 著　生涯学習研究社

西城の農家に生まれた少女が、学校の恩師や家族の支援を受け、教師となるという子供の頃の夢を実現する。最初に赴任したのが岡山県阿哲郡（現・哲西町）矢神尋常小学校、芸備線の矢神駅の情景が描かれている。その後、結核の再発による休職を経て小奴可の小学校に転任するのだが、芸備線の沿線の地名が多く出てくるのが素直に嬉しい。

戦前の農家の暮らしや学校教育の実情が誠実に描かれている。彼女は戦争で、将来の夫と実の弟を亡くし、「満州開拓青少年の母」に応募、大陸に渡って遺志を継ごうとするのだが……。教育者には是非読んでほしい本である。

「北里大学獣医学部 犬部!」

片野ゆか 著　ポプラ文庫

北里大学獣医学部は、2年生からは青森県十和田市にある校舎で授業を受ける。自然の中の（つまりド田舎）キャンパスで実在する「犬部」（現・北里しっぽの会）。犬や猫等を保護して面倒を看て、新しい飼主を募集する。自分のアパートに受け入れて、餌代や医療費も部員負担。

部員や動物達のエピソードが紹介されている。捨てられて人間不信になった犬は、なかなか心を開いてくれない。病気やトラブルが起きたときは、自分の生活や学業を犠牲にする。飼主のエゴに憤慨し、部員たちの奮闘に感涙。動物を飼っている人、飼いたいと思っている人に読んでもらいたい本である。

「浮かれ上手のはなし下手」

吉行和子 著　文春文庫

個性派女優として知られる吉行和子の自伝エッセイ。兄は吉行淳之介、妹は吉行理恵、共に芥川賞作家だ。父親はダダイスト作家の吉行エイスケ、母親の吉行あぐりの自伝エッセイは、NHKの朝の連続ドラマの原作になっている。こうした家族の素顔も、さりげなく描かれている。

「劇団民藝」からスタートして、アングラ劇団や映画、テレビドラマの女優として 50 年以上も活躍、彼女の語る思い出は、日本の演劇や芸能界の歴史でもある。大島渚監督の「愛の亡霊」は、大物女優の多くが出演を断ったので私に役がきた――、淡々とした文章が心地よく、まるで朗読劇を聞いているような気分。

「ぐんぐん伸びよう会」　（教室：庄原市川西町 241　連絡先：080-3631-9125　やないたえこ）

0～2歳

どんなことでも吸収する時期です。さまざまな言葉のシャワーをたっぷりと浴びせてあげましょう。童謡を歌ってあげる、絵本を読み聞かせてあげる、いつも語りかけてあげる。能力開発においては、黄金期ですね。

無料体験学習受付中！！　お気軽に問い合わせてくださいね。　対象者：0歳～小学6年生

虫と草木と人びとと㊾　中村慎吾
「ひろしま山の歳時記」

著者紹介：一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

大万木山（おおよろぎさん）――心にしみる原生林

大万木山とは「大きな万（よろず）の木が茂る山」というところから名づけられたようです。かつてはその名にふさわしい山でした。この山の北斜面には古くから陰陽を結ぶ小径（みち）が開かれ、人びとは山への畏敬の念をこめてブナの原生林下の道を往き来していたようです。

私が初めて大万木山へ登ったのは一九五〇年の夏のこと、うっそうと茂る原生林の醐醐味を満喫した思い出は今でも心に強く焼きついています。

しかし、大万木山は間もなく受難の時代を迎えました。原生林は皆伐されたのです。

一九五八年の晩秋、私は文化勲章の栄誉に輝く動物生態学者であった故今西錦司先生を案内して登りました。裸になった山肌を、放置されたブナの幹をまたいでの登頂でした。山頂で先生は無残な山の姿を見て「残念やな」とつぶやかれたこと、今でもはっきりと覚えています。

それから三十余年、山腹の植林は手入れがされないまま衰退していますが、植林をまぬかれたところはブナの若木が育ち、サンカヨウの群落も蘇ってきました。そして、サンカヨウが白い花をほころばせる頃、南からクロツグミも渡ってきて、美しいさえずりを聞かせてくれます。

ジャコウソウ――秋の訪れを告げる花

ジャコウソウの美しい花が咲く頃、あれほどにぎやかだったセミの声もとだえ、谷筋の林の中はひっそりと静まりかえっていて、山に秋が訪れたことを知ります。

秋の花には澄みきった秋空に似て青い色の花が多い中で、ジャコウソウの淡紅の花はよく目立ちます。しかし、このところジャコウソウはめっきり減り、めったにこの美しい花を見ることができなくなったのはとても残念なことです。

ジャコウソウとは麝香草という意味、麝香というのはヒマラヤから中国のチベット、雲南、四川省などの高い山に生息しているジャコウジカからとれる麝香という香料のことです。

ジャコウのような香がする草ということから名づけられました。しかし、香料や薬用として栽培されているジャコウソウは同じシソ科の植物ですが、少しなかまがちがうタチジャコウソウを指しています。ですからジャコウソウと言ってもタチジャコウソウほど葉をもんで香をかいでも

残念なことに、リゾート開発の計画が浮上し、山は再び受難の時代を迎えようとしています。やっと蘇生のきざしが見えはじめてきたこの頃、このままそっとしてやりたいと思うことしきりです。

強い香はなく、香料などの原料として利用することはありません。タチジャコウソウのように強いよい香がして、香料や薬用に利用されなくても、ほのかな香と清楚な淡紅の花をつけるこの草こそジャコウソウにふさわしいと、私は思います。

ジャコウはヨーロッパでは香料の中で最も高級なものとされているようですが、日本や中国では薬として珍重されています。むかし、子どもの救急薬としてよく使われた「奇応丸」や心臓の薬「六神丸」にはジャコウを配合していたそうです。そのようなことでジャコウジカはねらわれ、ジャコウジカは絶滅寸前ということです。

ジャコウソウが減ったのはどうしてか、はっきりとした原因はわかりませんが、私は近頃、森や林を大切にしなくなり、その上、手入れもおこたっているためではないかと思います。ジャコウソウをはじめ、多くの生き物たちが住み続けられる森や林を若い皆さんの手で守っていって欲しい思いで一杯です。

（写真はいずれも小川光昭氏撮影）

「つれづれ歌談」㊵

松岡 初枝

わが国の対外の戦の中で、六六二年の白村江（はくすきのえ）戦は古代の大きな敗戦であり、これによってわが国朝廷は六六三年から対馬、壱岐、筑紫に防人を配するようになりました。筑紫の太宰府に水城（みずき）を築いて防衛につとめました。大伴家持は兵部少輔として防人の統括にあたっていて、多くの歌を収集したのです。

・父母も花にもがもや草枕旅はゆくとも捧ごてゆかむ
　遠江の国の防人

父母が花であったらいいのに…。遠い旅路にも捧げ持っていこうと思うよ。別れの悲しさは、この若者をして父母と共にありたいと願う心が迫って来るような歌です。

・忘らむて野ゆき山ゆき我来れど
　我が父母は忘れせむかも
　駿河の国の防人

忘れようと思ってはるばる来たけれど、父母のことはどうしても忘れられないんだよ。

・大君の命（みこと）かしこみ磯に触（ふ）り海原わたる父母を置きて
　相模の国の防人

大君の詔（みことのり）をかしこみつつ、磯に触れそうなほどの海原を渡ってゆくのだ。父母を故郷に置いて、お役目のための旅をするのだ……。

三首とも、父や母を置いて出征する若い防人達の心情が伝わり胸に残ります。これらの歌の数々を我が身と同じ立場として共感した人達、すなわち明治の戦、大東亜戦争などで出征した若者が、少なからず万葉集を持って戦地に赴いたという事実があります。いつの世にも父母、妻、子を思う心は一緒なのです。

・やまとは国のまほろばたたなづく青垣山隠（やまごも）れるやまとしうるはし

古事記にある日本武尊の歌ですが、この歌を残して逝った彼の無念。万葉集と共に兵士達と共通するものであったでしょう。

島の王様

――現代御伽草子㊺

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

島の王様から荷物が届いた。いつものように着払いだ。麻縄の紐をカッターで切断して、フィリピンバナナの段ボールの上蓋を持ち上げると、清浄な芳香が部屋いっぱいに広がった。真っ黄色のレモンがびっしり詰まっている。

一つ、取り上げて、真理子さんの前に差し出した。彼女がとまどった顔で両手で受け取る。もう一つ取り出して、大きく口を開けてかぶりと齧った。彼女が眉間に皺を寄せて、すっぱい顔をする。

「食べてみてください。甘いですよ」

おそるおそる、彼女が皮のはじを齧った。うん、と大きく目を見開いて味わっている。今度は果肉の部分まで大きく齧った。

「おいしい！」

天涯と名乗る四十年輩の男が店の前で行き倒れていたのは、もう十年も前のことだ。ヒッチハイクの旅を続けていて、金を使い果たしてしまい、もう三日も食べていないという。冷蔵庫にあった冷や飯を湯漬けにして、梅干しと漬物で食べてもらった。いつものわたしの昼食である。

ホームレスかとも思ったが、ちゃんと住む家はあるという。瀬戸内海の外周が2キロほどの小さな島で、かつては住民も五十人ぐらいはいたそうなのだが、今は天涯さんが一人だけで暮らしている。といっても、島で生まれ育ったわけではなく、島民だった人物から家の管理と墓所の草むしりを条件に、自宅や周囲の畑を使わせてもらえることになったのである。

ライフラインはもう朽ちていて、夜はランプで飲み水は井戸水と天水（雨水）だが、慣れてしまえば問題はないという。煮炊きは石油缶から作った自作のストーブで、燃料は島の中にいくらでも転がっている。米と調味料は買う必要があるが、畑で作った野菜や放置された果樹園の果物を売ることで賄える。魚は釣り放題だ。養鶏場から廃鶏を安く譲ってもらって放し飼い、卵も収穫できる。

「ウツボやヘビも、けっこううまいんですよ」

そう言って天涯さんは、日焼けした顔でニヤリと笑った。

「島の王様ですね」

「そう、行き倒れの王様です」

二人で笑った。

「でも、どうしてこんな山奥まで？」

天涯さんの顔が曇った。

「潮抜きですよ」

しばらく考えて、ぼそりと言った。

「海のそばで暮らしていると、磯のにおいが心の中まで沁み込んでくる。たまには森林浴もしたいですから」

屈託のある顔だった。王様は孤独なのだろう。

旅費の足しにしてくれというわずかな金を、固辞する。それを強引に受け取らせた。

「じゃあ、島のレモンを送ります。木に成ったまま冬を越して熟したレモンは、皮ごと食べても甘いんです」

そう言って、店の本棚を見渡した。

「もう一つ、甘えていいですか？」

店頭にある五十円本コーナーの棚の前に足を運んだ。時間をかけてじっくり選んだのが、ウィルバー・スミスの「熱砂の三人」。古い文庫本で、活字が小さくてカバーもない裸本なので五十円均一の棚に入れたが、アフリカを舞台にした冒険活劇小説の傑作だ。相当な読書家で、本好きでもあるのだろう。

それから毎年四月の始めにレモンが届くようになった。わたしは返礼に、レモンの入っていた段ボール箱に、古本を詰めて送るようにしている。

レモンを食べ終えた真理子さんに声をかけた。

「お願いがあります。島の王様に貢物を届けてくれませんか？」

彼女が驚いた顔でわたしを見た。

「あの島だよ」

雲一つない秋晴れの空の下、漁師の村上さんが指差す先に、こんもりとした森のある島が海に浮かんでいる。

「わしら漁師は、ひょうたん島と呼んどるよ」

確かに、真ん中にくびれのような細い部分がある島は、ひょうたんの形に似ている。その島影がどんどん大きくなってくる。

半ズボンにTシャツ姿の王様が出迎えてくれた。村上さんが船のエンジンを切って、ゆっくりと堤防に近づく。舳先のタイヤがドスンとコンクリにぶつかる衝撃があって、船が停まった。村上さんがロープを放ると、天涯さんが受け取って鉄製のもやいに結ぶ。

私は、天涯さんの腕にすがるようにして上陸した。村上さんがキャスター付きの段ボール箱を運んでくれた。本が詰まってすごく重いのだが、軽々と抱えている。

「帰る時はまた電話してくれ」

小太りの村上さんが笑うと、本当の恵比須顔になる。携帯電話の番号を交換していた。

漁船が去ったあとで、天涯さんと対峙した。天涯さんはまだ一言も口を開いていない。

「遅くなりましたが、どら書房より本をお届けに参りました」

レモンを齧った日から半年が過ぎていた。新卒の看護師として介護施設に就職したばかりで余裕がなく、まとまった休みが取り辛いということがある。そして何よりも、義父に相談する必要があった。義父の許可を得る必要があった。ママが亡くなってからも、血のつながらない私の面倒をみてくれた。

聡介さんを地元の古本屋で見たという電話をくれたのは、ママの高校時代の同級生だったという。墓参りにでも来たのだろうか。ママや聡介さんが生まれ育った集落はすでに廃村になって久しく、生家の家屋も荒廃している……。

ママがこの話を私にしてくれたのは、同級生の電話からだいぶ月日が経ってからで、病室の中だった。病状がかなり悪化していたので、伝えておかなければと思ったのだろう。実際、その話を聞いていなければ、この島まで私が来ることはなかった。

「まりこ……、なのか？」

驚いた。ママが妊娠しているのを知らないで、この人は東京のアパートから姿を消したと聞いている。私の存在も知らないと思っていた。

「どうして私の名前を知ってるのですか？」

「学校の同級生が名前を呼んでいるのを聞いて……」

記憶がよみがえった。中学生のときだった。視線を感じて振り向いたら、くたびれた作業服を着た中年男が立っていた。その人は、あわてて視線を逸らせたが、どこかで会ったことがあるような気がしたのを覚えている。確かにこの人だ……。

（会いに来てくれたんだ……）

涙が込み上げてきて、顔を覆ってその場にしゃがみこんだ。おずおずと震える手が髪の毛に触れた。濃厚な磯のにおいが、私の全身を包み込んだ。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
　無料の漫画ルームもあります。（ただ今閉鎖中）
・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※10 月 6 日（金）～ 10 日（火）臨時休業です。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30 ～ 18:30
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載㉕

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第二部　歴史事項を見る

十月一日大坂冬の陣 慶長十九（一六一四）年

徳川家康は大坂城攻撃を決意。大義名分は、一つは、方広寺の梵鐘に寄せた鐘銘の銘文の中の「国家安泰」と「君臣豊楽」に、京都五山の僧、幕府儒者林羅山を使い非難の理由付けをした。前者は「家康」を分断している、後者は豊臣家のみの繁栄をうたうものと。今一つは、関ヶ原合戦により大量の浪人が生まれた。彼らは徳川の天下を豊臣が奪い返す事を願い、大坂に集まってきた。豊臣秀頼は十万人もの浪人を抱えたことになる。豊臣家は六十五万石、適正家臣は二万である。幕府に言わせれば、それこそ反逆のためにほかならないと。

家康の出陣命令で、大坂に集まった軍勢は二十万をこえた。大坂方が十月十二日に堺を攻撃し、開戦となった。その間、停戦の提案もあったが折り合わず、十二月二十二日双方が起請文を交換して休戦が成立。内容は、大坂城の外堀を埋めることであった。しかし、約一ヶ月後には内堀の埋め立てにも着手する。そして、大坂夏の陣へと向かうこととなる。

十月十五日大政奉還 明治三（一八六七）年

十五代将軍徳川慶喜は政権返上を朝廷に申し入れ、翌十五日それを許され、鎌倉幕府以来の武家政治が終結した。慶応二（一八六六）年十二月、公武合体派の孝明天皇が崩御する。慶応三（一八六七）年一月、満十四歳の明治天皇が即位する。朝廷内の主導権は、討幕派の岩倉具視らが握った。この慶応三年は、「武力討幕派」と、「大政奉還派」との葛藤の年である。主力藩は、薩摩・土佐・広島・長州で、会談、協議し盟約、同盟も結び”大政奉還”建白書作成、提出へと進んで行った。

十月三日、建白書は土佐藩から幕府へ提出される。八日、広島・薩摩・長州各藩で、武力でもって幕府を倒すことを議決する。十三日薩摩へ、十四日長州へ、”討幕の密勅”が下された。

十四日には、将軍慶喜は政権の返上を朝廷に願い出て、十五日にはこれが許され、政権は朝廷に返上された。

十月二十日文永の役 文永十一（一二七四）年

元・高麗連合軍は、博多湾の沖合いに集結し、この日上陸を開始した。主力の元軍二万、日本軍約一万で来攻を待ち構えた。

元軍の兵は、相次ぐ侵略戦争に従軍し戦いに慣れていたため、日本軍の予測をはるかに上回って精強だった。日本軍を仰天させたのは、火薬を用いた「てつほう（鉄炮）」であった。戦闘開始の前に鏑矢（かぶらや）を射て、名乗りをあげるという日本独特の戦法は全く通用せず、討ち死にする武士が続出した。日本軍は敗戦に敗戦を重ねた。しかし、元軍は軍船にひきあげた。その夜、博多湾を吹き荒れた大風により、海上の元軍は壊滅的な打撃をこうむった。

十月二十五日島原の乱 寛永十四（一六三七）年

九州島原・天草で起ったキリシタン・農民の反乱。この地は、もと旧領主小西行長、有馬晴信がキリシタンで領民に信徒が多く、旧領主の家臣で浪人となり帰農者が多い。新領主松倉重政・勝家と寺沢堅高にとってキリシタン弾圧は至上の課題であった。

この地方は凶作に見まわれていた。領主は年貢未進農民にもキリシタン弾圧と同じ責苦を負わせた。これが農民とキリシタンとを同じ窮地に追いつめ、団結させることとなった。

この年、島原の有馬村代官が殺されたのを口火に、次々に襲われた。神社仏閣が放火された。天草では富岡城を攻めたあと、島原勢と合流して、天草四郎を大将とする約三万七千人の一揆が原城に籠った。

第一回攻撃は十二月十日に始まり、翌年二月二十八日に天草四郎をはじめ女子供まで、一揆全員が戦死または殺された。鎮圧に幕府、西国大名までもが関わった。

領主松倉、寺沢は後に改易となった。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」の会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。）

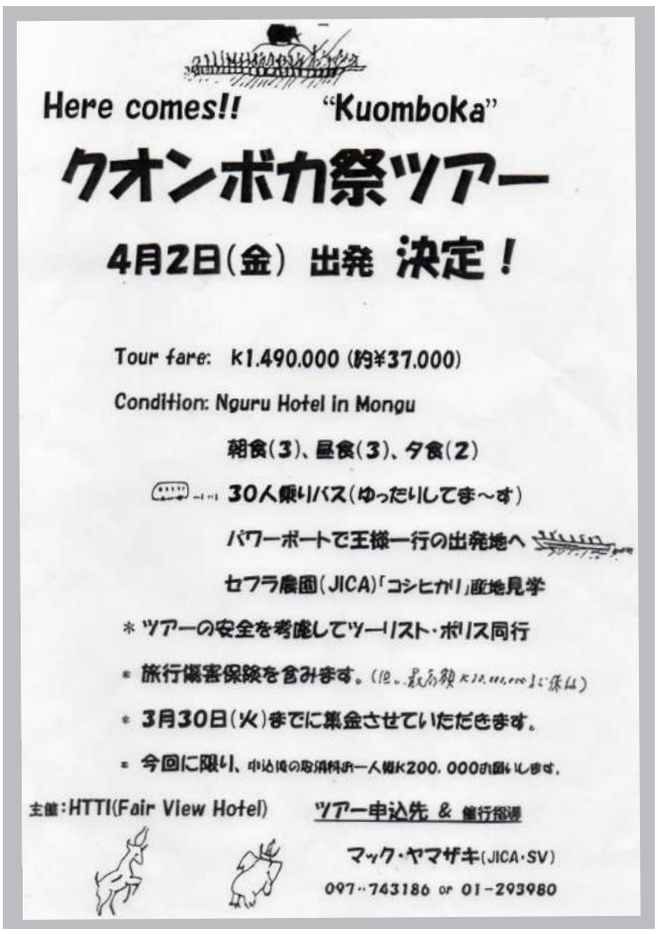
シニア海外ボランティア・エピソード⑩

「クオンボカ祭り 水没台地からの大移動」

山崎 允（まこと）

ザンビアの一大催事「クオンボカ祭り」を旅行商品に企画することに決めた。そろそろ帰国を意識しての大仕事だ。大統領もやってくるというこの祭りは、今までに企画されたことがないと、観光省でも興味を持ってくれた。

ザンビアが英国統治下のころ、英国政府から「総督」の肩書を許された王様とその一族（ロジ族）がいる。年に一度、その一族の生活の足場となる台地が水中に沈む。北のコンゴ民主共和国から押し寄せる雨季の洪水が瞬く間に平原を湖に変えてしまうのである。そのため、ロジ族は標高の高い台地も所有しており、王様とその一族をはじめ家畜に至るまで高台に船（はしけ）で8時間かけて移動する。



これがお祭りなのだ。この祭りを見ようと隣国、外国、国内からの見物客の数は2万～3万人と言われている。「クオンボカ」の語源は「乾いた土地への引っ越し」という意味で200年も前から実施されている。王様が乗るはしけには約120人の漕ぎ手（パドラー）が立ったまま、2mもあろう櫂を水面下の地面に押しつけて前進する。

カウンターパートと私は王様の秘書に依頼して王様への謁見を取り次いでもらった。彼は謁見するための特別な礼儀作法をてほどきしてくれた。先ず、横座りをして、王様に向かって横向きのまま約1mいざり寄る。7、3に構えた姿勢で「ポン、ポン」とかしわ手を打つ。この姿勢は、日本の外国人向けの夜のツアーで、花魁が脇息（きょうそく）に肩肘を支えて「ぬしさん、いっぷく、いかがかえー」と長いきセルを差し向けるシーンを連想させた。無事謁見をすませた王様は普通のビジネススーツの方で、身近に感じることが出来た。

次に、20人用の部屋を確保するためにホテルを訪ねた。ロビー、客室、シャワー、洗面所、トイレなどが使えるか調査して、仮予約をすませた。支配人に「どんなことがあっても、指定した部屋を他の客に（特に権力をちらつかせる国会議員に）横取りされないようJICA宛てに念書を書いてもらった。予約金として2百ドルも払った。

これでも当日国会議員が突然やって来て無理やり部屋を横取りしかねないので、グループ到着前日にカウンターパートに宿泊させ、翌日の宿泊分のルーム・キーを全部預かることにする。やれることはほとんど全部やり遂げることができた。

しかし、困ったことに、いつこのお祭りが開催されるかが分かっていない。移動するはしけの船底が水面下の台地と接触しないほどの水量が溜まっていないと始まらない。水が溜まったとしても次の難関が待ち構えている。まじない師（ウイッチ・ドクター）により「月の満ち欠け」がどうのこうのと言って、ありがたい（本当は迷惑な）お告げが必要なのだ。

こうして苦心惨憺して企画したツアーの募集用チラシがようやくでき上がった（画像参照）。

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

葬列を見送る案山子棚田村　近藤 昌平

星月夜葉書一枚出しに行く　冨久 光

久々に人々集う大花火　片岡 正人

白菜の植え床作る今日も明日も　隆愚

蠟燭はＬＥＤらし絵灯籠　大槇 三代子

お互いに競っているか虫すだく　寺内 龍二

幻獣も人影もなく蕎麦の花　赤川 冬人

食品を押しのけ並ぶ缶ビール　松岡 初枝

酷暑の日々の我が冷蔵庫

投稿＆寄稿

候のことば

「八入（やしお）の雨」

隆愚

この時期の雨は「八入の雨」とよばれます。染色のとき、染料に一度だけ浸すことを「一入（ひとしお）」といい、何度も何度も浸して濃く染め上げる事を「八入」といいます。

雨が降るたび、樹木が色濃く染まっていく様子を染物にたとえた言葉です。

斯の如く秋の時雨に濡れ申す　高浜虚子

「福塩線の旅」

赤川仁洋

9月に入って、月・火曜日の定休日を利用して、一泊で福山に出かけた。久々の遠出である。ローカル線ストロールの取材を二ヵ月休んでいるので、列車を利用しようと思った。最寄りの福塩線の駅まで車で行き、列車で往復するのである。

甲奴駅の駐車場に車を停めて、6時57分の列車に乗った。これを逃すと、午後3時過ぎまで府中行きはない。店（どら書房）のお客さんにもらった青春18きっぷを利用。あと2日分残っているが、もう出かける予定がないからと頂戴した。福山駅まで990円、18きっぷを使うには惜しいが、有効期限が9月10日なので、ありがたく往復で2日間、使わせていただく。

車内は高校生の姿が目に付く。しかも、3種類の違う制服。通学列車として賑わっている。列車は芸備線と同じディーゼル式のワンマンカー。夏の間に伸びた沿線の草木が、シャーシャーと窓ガラスを擦る音が聞こえてくる。これも芸備線と一緒（苦笑）。

備後三川駅を過ぎてから長いトンネルに入った。いつまでたっても外に出ない。あとで調べてみたら、全長6123mの八田原トンネルで、1989年のダム建設に伴って新設されたものらしい。ローカル線のトンネルとしては、只見線の六十里越トンネル（6359m）につぐ長さ。それに伴い、従来の八田原駅は芦田湖（人造湖）の底に沈んでいる。

列車は府中駅が終点で乗り換えとなる。福山行きはパンタグラフ（集電装置）のある電車で、車内の内装も豪華な複数車両となる。塩町―福山間の直通便がない理由がようやく理解できた。しかし、田舎と都会を府中駅で区分されたようで、いささか複雑な気分である。

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

http://shobara.wix.com/dorakuroa

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：10月14日（土）9:30 ～ 11:30

テーマ：「移住者の視点でみた、庄原の宝物とは」

講師：柳井徳磨氏
（獣医法医学研究所所長）

場所：生活交流館
（備後庄原駅隣接）

参加費：500 円
（学生 200円、お茶菓子代込み）

申込み＆問合せ：080-3631-9125（やない）

蓄音機展

庄原市口和郷土資料館 45 周年イベント
蓄音機展――今よみがえるいにしえの音

「エジソン蝋管型、ラッパ外付型、ラッパ内蔵型、ポータブル型、床置型、おもしろタイプなど、さまざまな蓄音機４０台を動態展示。蓄音機操作体験コーナーもあります。

場所：庄原市口和郷土資料館（0824-87-2230）ロビー１階廊下
日時：8 月 28 日～ 10 月 28 日（土）開館日（月・木・土曜日）
午前 9 時～午後 5 時（入館無料）

徳岡政暁 陶芸作品コーナー

陶芸家、画家（徳岡佛性坊）として多彩な活動をしてきた故・徳岡政暁氏の陶芸作品の展示販売を、どら書房の一角でしています。
茶碗や花器、陶板や料理皿、多様な作品を展示しています。あなたのお気に入りの逸品が見つかるかもしれません。
※天井が低いので頭上注意！

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中！●
（青森産ニンニクホワイト六片使用）

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの効果が期待できます。
（80ｇ入り 500円）
※売り切れのときはご容赦ください。

編集後記

◇ようやく秋めいてきたので、鉄道ストロールを再開。楽しい取材でしたが、体力の低下と腰痛の悪化を自覚（苦笑）。それにしても、距離が長かった。
◇先月号で告知しましたが、音谷健郎さんの「文学探訪」は一回お休みです。ページ数も全部で12頁となります。
◇最近、レコードがよく売れます。現在、古本の引取＆買取はお休みしているのですが、レコードは歓迎します。とくに80年代のアイドル歌手が人気。
◇10月は所用で6日(金)～10日(火)まで留守にします。9日の九日市も休店になりますので、よろしくお願いします。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第265回　　くんちいち

しょうばら九日市

出店一覧（順不同）

- 文屋
- お福
- 郷屋
- ぬくもり
- ちくちくはうす玉手箱
- クラフトショップ
- くららおばさん
- 工房アム
- 農楽会
- 二八そば加工所
- とらぢ
- 健康企画グループ
- さだっさ
- 里山キッチンほっぺ
- 久代水産
- くんえん工房　香豚
- 克国水産
- 田崎屋
- 宮川屋
- 和み屋
- どんぐりーず
- 土遊び布遊び
- てしごと比和
- 柳屋
- かぐや姫
- 地域家族まなび場三軒茶屋
- 寄能商店
- ユタカコーヒー
- お好み焼きこっちゃん
- 鮎屋
- S.Z wood works
- 渡辺農園

※青文字は新規出店

くららおばさんの紙芝居

★オリジナル作品★（お子さんに駄菓子サービス）　場所：まちなか広場

開演：10：00～、11：30～（2回）

10月9日(月)

体育の日（祝日）

9:00～13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
10月8日(日)～10日(火) 10時～15時
第19回庄原絵手紙大賞作品展

★風龍→九日市スペシャルで餃子200円！

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円

★どら書房→10月6日(金)～10日(火)休店

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　TEL/FAX(０８２４)７２－８２８５
〒７２７－００１３　庄原市西本町２－１－１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp